

自己評価報告書

平成23年 5月13日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20251007

研究課題名（和文） フェニキア・カルタゴからみた古代の東地中海

研究課題名（英文） Ancient history of East-Mediterranean from the viewpoint of Phoenician and Punic archaeology

研究代表者

泉 拓良（IZUMI TAKURA）

京都大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：30108964

研究分野：人文学・史学・考古学

科研費の分科・細目：人文学B・考古学

キーワード：①フェニキア ②カルタゴ ③考古学 ④地下墓 ⑤縦穴墓 ⑥レバノン ⑦チュニジア ⑧リビア

1. 研究計画の概要

(1) 古代の地中海をギリシア・ローマの文献資料からではなく、フェニキア・カルタゴ考古学からみることを目標とする。

(2) そのためにレバノンでの発掘調査、チュニジアとリビアにおける遺跡踏査を実施し、さらに現地博物館や報告書等に記載された考古資料を収集する。

(3) レバノンとチュニジア・リビアの考古資料を統一した基準で分類・分析しフェニキア・カルタゴの展開を考古学から明らかにする。フェニキアにおけるヘレニズム・ローマ化の展開を墓制の研究から明らかにする。

2. 研究の進捗状況

(1) レバノン共和国ティール市郊外のラマリ地区において発掘調査を実施した。

①平成20年度はラマリ地区126番地・199番地で発掘調査し、199番地で紀元前2世紀頃の建物基礎と紀元後1世紀の縦穴墓を発見した。以前の調査で出土したタニット女神記号付鉛製分銅やギリシア諸都市製のアンフォラ等からヘレニズム時代のこの地域の特徴を研究している。また、200番地での発見に続き今回の紀元後1世紀縦穴墓の発見は、ローマ時代地下墓の構造変遷を示す資料である。

②平成21・22年度は199番地で、ラマリ地区最大級の地下墓を発掘し多くの遺物を発見した。重要な出土遺物として鉛製呪詛板(14.7cm×6.0cm、A.D. 3世紀頃)がある。約1100文字のギリシア文字と記号群が刻まれていて、呪詛者が牛追い達との金銭トラブルに巻き込まれ、彼らを黙らせようと神々に依頼したものと読める。ユダヤ教的要素も認められるが呪詛

者はキリスト教徒であり、ローマ時代フェニキアにおける初期キリスト教徒の様子を明らかにした。その他、土製塑像やディオニュソス土製マスクなど、埋葬儀式と係わる遺物が多く出土しており、研究を進めている。

(2) カルタゴ諸都市の踏査。①平成20年度はリビアとイタリア（シチリアを中心に）、②平成21年度にはチュニジアでの踏査をおこない、地中海中央部におけるカルタゴ諸都市の立地と規模の調査、石柱礫積建築手法の調査、墓地の構造と配置の調査等をおこなった。出土遺構と遺物から、フェニキアとカルタゴをいかに識別できるかが課題であるが、紀元前6～5世紀頃に転換期があるという予測を考えている。

(3) フェニキア・カルタゴの考古学的諸属性の広域比較研究するため、国際集会を日本で開催する企画を進めている。スペインM. Eugènia AUBET SEMMLER、イタリアDr. Gioacchino Falsone、チュニジアDr. Ahmed Ferjaoui、レバノンDr. Hassan BadawiとM. Nader Sicrawi氏から参加の内諾をえた。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に伸展している。

理由：北アフリカにおける調査は、当初はリビアを中心に考えていたが、現地での調査をおこなっている時に今日ある状況が予想されたため、チュニジアに中心を移したが、平成22年度はそれも「革命」により困難になった。しかし、レバノンへ調査を集中することにより、平成22年度に当地最大級の地下墓を完全に発掘することができた。

4. 今後の研究の推進方策

現地の調査は予定通り平成22年度で終了することができたので、最終年度である平成23年度は研究国際集会の開催と成果報告書の作成に全力を集中する。

(1) フェニキア・カルタゴの考古学的諸属性の広域比較研究するための国際研究集会の開催。日本ではフェニキア・カルタゴはあまりにも無名であり、啓蒙的役割をもたせて、東京、弘前、奈良、京都で研究集会を開催し、本科研費の諸研究成果を、連携研究者の地元で発表する。そこでは研究代表者、分担者、連携研究者の発表だけではなく、その評価と各研究と関係する海外での研究の紹介を、各国の代表的な研究者がおこなう企画である。開催は11月10日～21日の予定。

(2) 研究成果報告書の作成 研究集会に向けて研究成果をまとめ、研究集会での海外研究者による資料の提示、討論を含めて研究成果報告書をまとめる予定である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①泉拓良・辻村純代・前野弘志「フェニキア・ヘレニズム～ローマ時代の墓制の研究ーレバノン、ラマリ遺跡ローマ時代地下墓TJ10の発掘調査2010」『平成22年度考古学が語る古代オリエント 第18階西アジア発掘調査報告会報告集』、査読無、平成22年度、2011、130-135頁

②宮坂朋「ローマのヘルクレス/ヘラクレス」『第16回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』、査読無、第16回、2010、76-77頁

③泉拓良・藤本悠「カザフスタン・トゥルゲン川扇状地でのクルガンの確認踏査ー2008年度ー」『平成21年度考古学が語る古代オリエント 第17回西アジア発掘調査報告会報告集』、査読無、平成21年度、2010、130-135頁

④泉拓良・辻村純代「フェニキアのネクロポリスーレバノン・ラマリ遺跡の発掘調査ー」『平成21年度考古学が語る古代オリエント 第17回西アジア発掘調査報告会報告集』、査読無、平成21年度、2010、124-129頁

⑤宮坂朋「半開き扉ーヴィア・ラティナー・カタコンベ墓室F壁画画像解釈ー」『美術史』、査読有、66号、2009、397-410頁

⑥南川高志「ハンガリーのローマ帝国ーブダペスト市内のローマ遺跡についてー」『西洋古代史研究』、査読有、8号、2008、23-41頁

[学会発表] (計4件)

①泉拓良・辻村純代・前野弘志、フェニキア・

ヘレニズム～ローマ時代の墓制の研究ーレバノン、ラマリ遺跡ローマ時代地下墓 TJ10の発掘調査 2010、西アジア考古学会、2011年3月27日(大震災のため中止)、古代オリエント博物館

②泉拓良・辻村純代、フェニキアのネクロポリスーレバノン・ラマリ遺跡の発掘調査ー、西アジア考古学会、2010年3月28日、古代オリエント博物館

③泉拓良・他、The preliminary Report of Excavation at Ramali in Tyre、VII èmecongrès international des études phéniciennes et puniques、2009年11月11日、Hammamet Tunisia

④泉拓良、Archaeological Survey on the alluvial fan of Turgen River in Kazakhstan、2008、Reconceptualizing Cultural and Environmental change in Central Asia: An Historical Perspective on the Future、2009年2月1日、総合地球環境学研究所

[図書] (計2件)

①泉拓良・他、京都大学大学院文学研究科、フェニキア・カルタゴ 考古学から見た古代の地中海 2009・2010年度、24頁

②泉拓良・他、京都大学大学院文学研究科、フェニキア・カルタゴ 考古学から見た古代の地中海 2008年度、16頁

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

①平成22年12月8～14日に京都大学総合博物館で、発掘調査で出土した鉛製呪詛板の特別展示をおこない、1000名を超える有料入館者があつた。

<http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/modules/special/content0018.html>

②リビアとチュニジア踏査成果が参加した小方登のHPに掲載されている。

リビア

<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/1ibya2008/index.html>

チュニジア

<http://www.hgeo.h.kyoto-u.ac.jp/ogata/tunisia2009/>